

研究資料

感性型人間の図柄に対する感情評価—男女比較—

Evaluation of Feelings of the Hyper-Sensitive toward Patterns

～Comparison between the sexes～

中谷眞三代

Masayo Nakatani

The University of Shiga Prefecture

鈴木 伸子

Nobuko Suzuki

〃

Abstract

Our previous study revealed the characteristics of evaluations by the hyper-sensitive men and women. In order to elucidate the differences in feeling evaluation of patterns between the hyper-sensitive men and women, pattern evaluations were compared between the both groups. The results were as follows :

- 1) There were significant differences in the factor structures between men and women.
- 2) The women had a larger tendency to evaluate the patterns of flower and polka dots (curve patterns) to be more modern and the striped and checked patterns (linear patterns) to be more sensible compared to the men.
- 3) The respective evaluations of the positive and the negative patterns for polka dots and flower were contray each other in both sexes ; The positive and the negative patterns were evaluated more sensible by the men and the women, respectively.
- 4) The women subjects evaluated in all of the four patterns to be elegant, modern and sensible.
- 5) The differences in the evaluations between the linear and curve patterns or the positive and negative patterns were significantly larger in the women than the men.
- 6) The men subjects tended to evaluate a pattern based on shape and the women subjects on color.

要 旨

既報において、女性高感度群、男性高感度群それぞれの特徴的結果を得た。今回は男女高感度群による図柄に対する感情評価の相違点はどのような点であるかを究明したいと考え比較・検討したところ次のような結果を得た。

- 1) 明らかに因子構造に違いがみられた。
- 2) 女性は男性より花柄・水玉柄（曲線柄）をモダン、縞・格子柄（直線柄）をセンスがあると評価していた。
- 3) 水玉柄・花柄のポジ・ネガに対する評価が逆で女性はネガを男性はポジをセンスがあると評価していた。
- 4) 女性は男性より4図柄ともエレガントでモダンでセンスがあると評価していた。
- 5) 女性は男性より直線・曲線柄間、ポジ・ネガ間の評価の差が大であった。
- 6) 女性は色で、男性は形で評価する傾向が強かった。

1. はじめに

情緒的評価項目には評価に個人差が多く、その個人差は感性によることが大きく、反対に理性や知性では測りしれない不明確な部分と考えられている。この感性の高い人は新しいものや流行への興味・関心が強く、また、それらを取り入れることも積極的であるといわれている¹⁾。一方被服は直感や感情に訴えて美的感情を誘起するものであり、色・図柄・スタイル・布のテクスチャなどが互いに共存して感情効果に影響を与えている。図柄に対して主に機能的評価項目を用いた縞柄^{2)~5)}や水玉柄^{6)~9)}とイメージの関わりについての報告はあるが情緒的評価項目を用いた報告はない。前報¹⁰⁾¹¹⁾で筆者らは女性と男性における感性型人間の基本的図柄に対する感情評価の特異性を報告したが、今回は男女の相違点を究明したいと考え両者の比較・検討を行った結果、若干の知見を得たので報告する。

2. 方法

2.1. 図柄試料 前報¹⁰⁾¹¹⁾と同じである。

2.2. 実験方法 前報¹⁰⁾¹¹⁾と同じである。

2.3. 被験者の抽出およびデータ処理法

前報¹⁰⁾¹¹⁾と同じである。

3. 実験結果および考察

3.1. 一対比較法

男女高感性群の項目別各図柄の尺度値¹⁰⁾¹¹⁾から評価の違いをみると次のとおりである。

男女間の評価に特に差があったのは花柄ネガと、縞柄ポジであった。花柄ネガにおける〈快適〉〈近代的〉〈親しみやすい〉〈好き〉の項目では女性は上位に男性は下位に評価していた。

また、縞柄ポジにおける〈魅力的〉〈優雅〉〈好き〉では女性の方が上位に、反対に〈快適〉〈近代的〉では男性が上位に評価していた。さらに、水玉柄ポジの評価についても多くの項目で女性が下位に男性が上位に評価していた。

図柄別にみれば、全体的に男性は女性に比して縞・格子柄と水玉・花柄というまとまった評価をしているといえた。それに対し、女性が同様の見方をしている項目は〈きれい〉〈個性的〉〈洗練された〉のみであった。これについては図柄への関心の度合等も影響していると推察された。

縞柄に対して男女間の評価に差がみられ、女性は〈上品〉〈優雅〉では最上位に男性は最下位に評価して

いた。

水玉柄に対しては、〈個性的〉では女性の方が上位、〈親しみやすい〉〈好き〉では男性が最上位に評価していた。

花柄に対しては、女性が上位に評価している項目が多かった。また、〈近代的〉では男女間で評価が全く反対で、女性は水玉・花柄を、男性は縞・格子柄を近代的と評価していた。

つぎに、直線・曲線柄（ポジ・ネガ別）の尺度値の男女差は以下のとおりであった。

女性は曲線柄ネガを最上位に評価している項目が多かったのに対し、男性は〈魅力的〉〈優雅〉のみであった。ポジ・ネガ、直線・曲線柄での評価において男女が同順位であったのは〈きれい〉〈魅力的〉〈洗練された〉であった。また、ポジ・ネガすなわち色で評価しているのは女性に多く〈快適〉〈近代的〉〈上品〉〈優雅〉の項目で、男性は〈個性的〉〈快適〉〈親しみやすい〉の項目であった。

また、直線・曲線柄すなわち形で評価しているのは男性に多く〈近代的〉〈上品〉〈優雅〉の項目で、女性は〈個性的〉〈親しみやすい〉の項目であり、それぞれの評価は男女間で全く逆であった。男女ともポジ・ネガ（色）で評価していた〈快適〉では評価が逆で、男性はポジが上位、女性はネガが上位であった。なお、評価のバラツキは男性の方が大であった。

男女間の評価に差があるかどうかスピアマンの順位相関係数¹²⁾を求め、その検定¹³⁾を行ったのが表1である。全ての項目で男女間の評価に差が認められた。

女性高、低感性群間、男性高、低感性群間でも共通した評価がみられていた〈きれい〉は相関係数0.71で唯一評価に共通性がみられた項目であった。〈きれい〉の項目は老若性別をこえたイメージであると推察された。

以上により、男性は直線・曲線柄（形）で、女性は

表1 順位相関係数

項 目	ρ	有意差検定	
		5 %	1 %
き れ い	0.71		*
個 性 的	0.36	*	*
魅 力 的	0.36	*	*
快 適	-0.64	*	*
近 代 的	0.07	*	*
上 品	0.31	*	*
洗 練 さ れ た	0.54	*	*
親 し み や す い	0.50	*	*
優 雅	-0.14	*	*
好 き	-0.52	*	*

ポジ・ネガ（色）で評価する傾向が強かった。色型人間は感性派で若い女性に多い¹⁴⁾とされているが、今回の結果も同調していた。また、順位相関係数において相関の低かった〈上品〉〈優雅〉というイメージに対して図柄で評価する場合、男女間で判断が異っていた。この点については、男女それぞれにおける順位相関係数も低く¹⁰⁾¹¹⁾、評価のバラツキもあったことから、個人差も関与していると推察された。

表2 因子分析結果（男女全体）

因子	評 定 項 目	因 子 負 荷 量			共 通 性
		I	II	III	
I	上品	0.967	-0.152	0.119	0.972
	好き	0.870	0.270	0.102	0.841
	親しみやすい	0.862	0.321	-0.199	0.886
	優雅	0.707	0.393	0.408	0.822
II	近代的	0.032	0.909	0.315	0.927
	個性的	0.269	0.845	0.186	0.821
	きれい	0.463	0.811	-0.264	0.941
	魅力的	0.627	0.726	-0.116	0.934
	快適	-0.103	0.692	0.554	0.796
III	洗練された	0.112	0.113	0.977	0.980
固 有 値		5.406	2.157	1.357	
寄 与 率（％）	因子別	54.1	21.6	13.6	
	累 積	54.1	75.6	89.2	

3.2. 因子分析

一対比較法で求めた男女高感度群の得点を素点として項目別各図柄の相関係数を求め図柄のイメージに関する主因子を見出すため因子分析を行った。全データでの因子分析の結果表2のような3因子が抽出された。

第Ⅰ因子は〈上品〉〈好き〉〈親しみやすい〉〈優雅〉で表され、これを“エレガントの因子”と命名した。

第Ⅱ因子は〈近代的〉〈個性的〉〈きれい〉〈魅力的〉

〈快適〉、第Ⅲ因子は〈洗練された〉で表され、これら

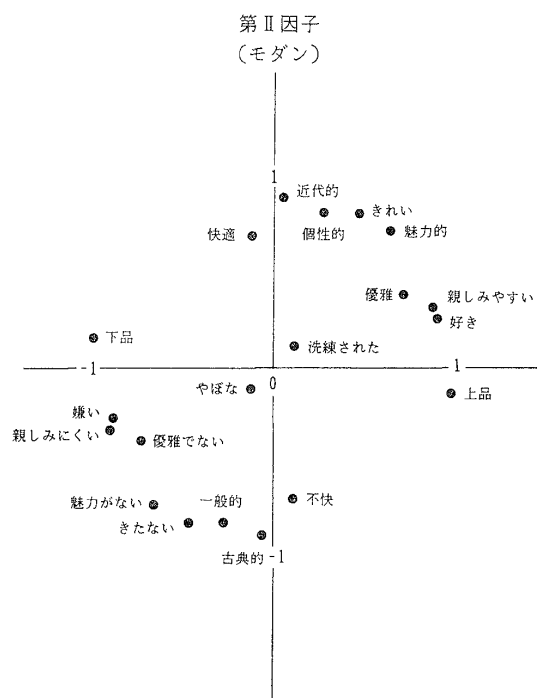
をそれぞれ“モダンの因子”“センスの因子”と命名した。

これらの因子の寄与率、累積寄与率は表のとおりで図柄のイメージをほ

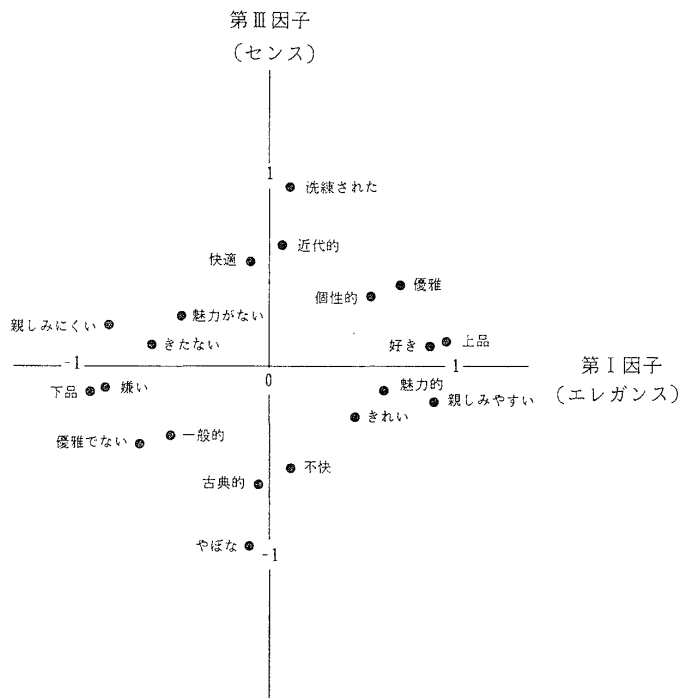
ぼこれらで説明しうると考えられる。つぎに男女高感度群別にみれば、両群の因子構造に明らかに違いが認められた。

男性において、第Ⅰ因子に属しており、〈きれい〉〈魅力的〉のイメ

ージと関連の深かった〈優



イメージ1（第Ⅰ因子軸×第Ⅱ因子軸）



イメージ2（第Ⅰ因子軸×第Ⅲ因子軸）

図1 各尺度の布置

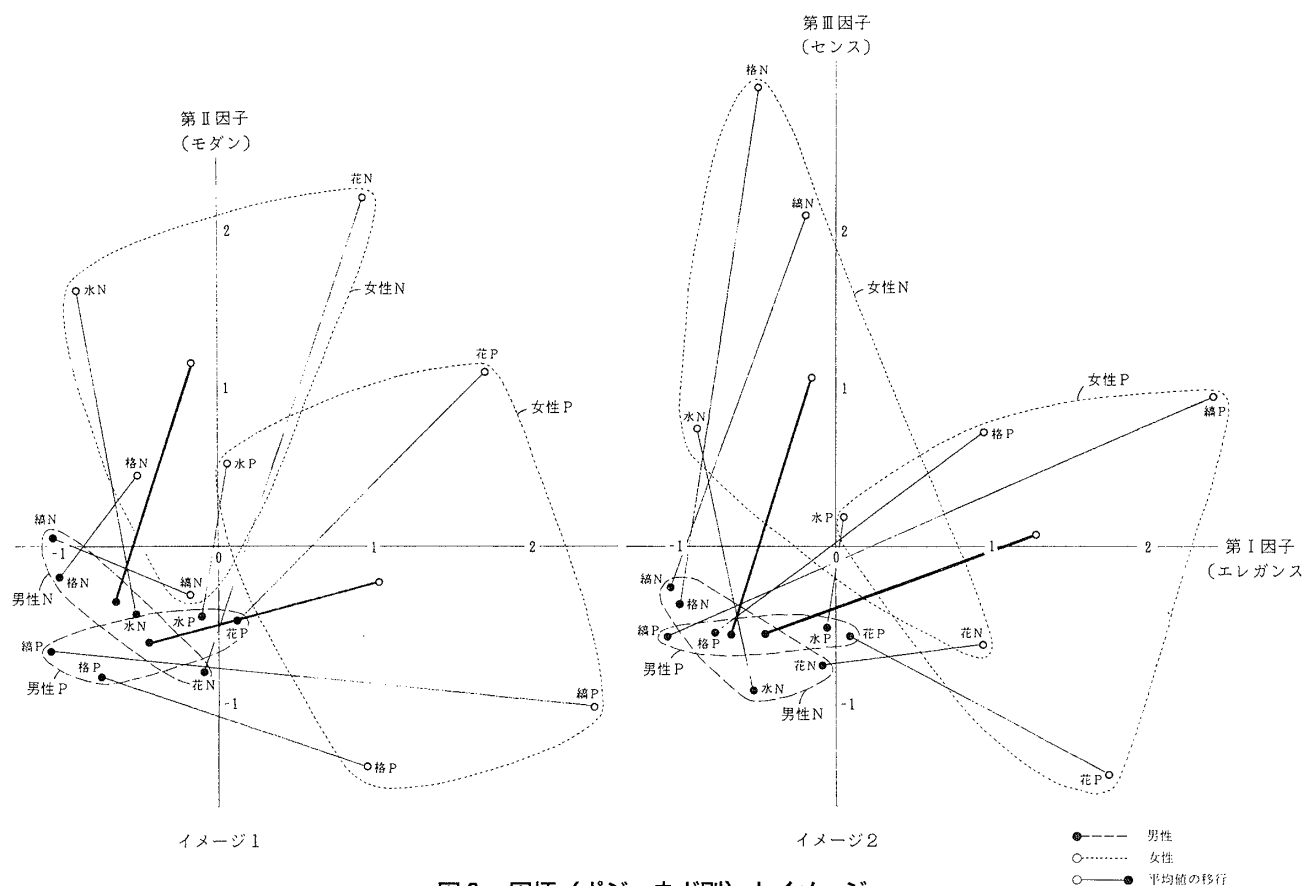


図 2 図柄 (ポジ・ネガ別) とイメージ

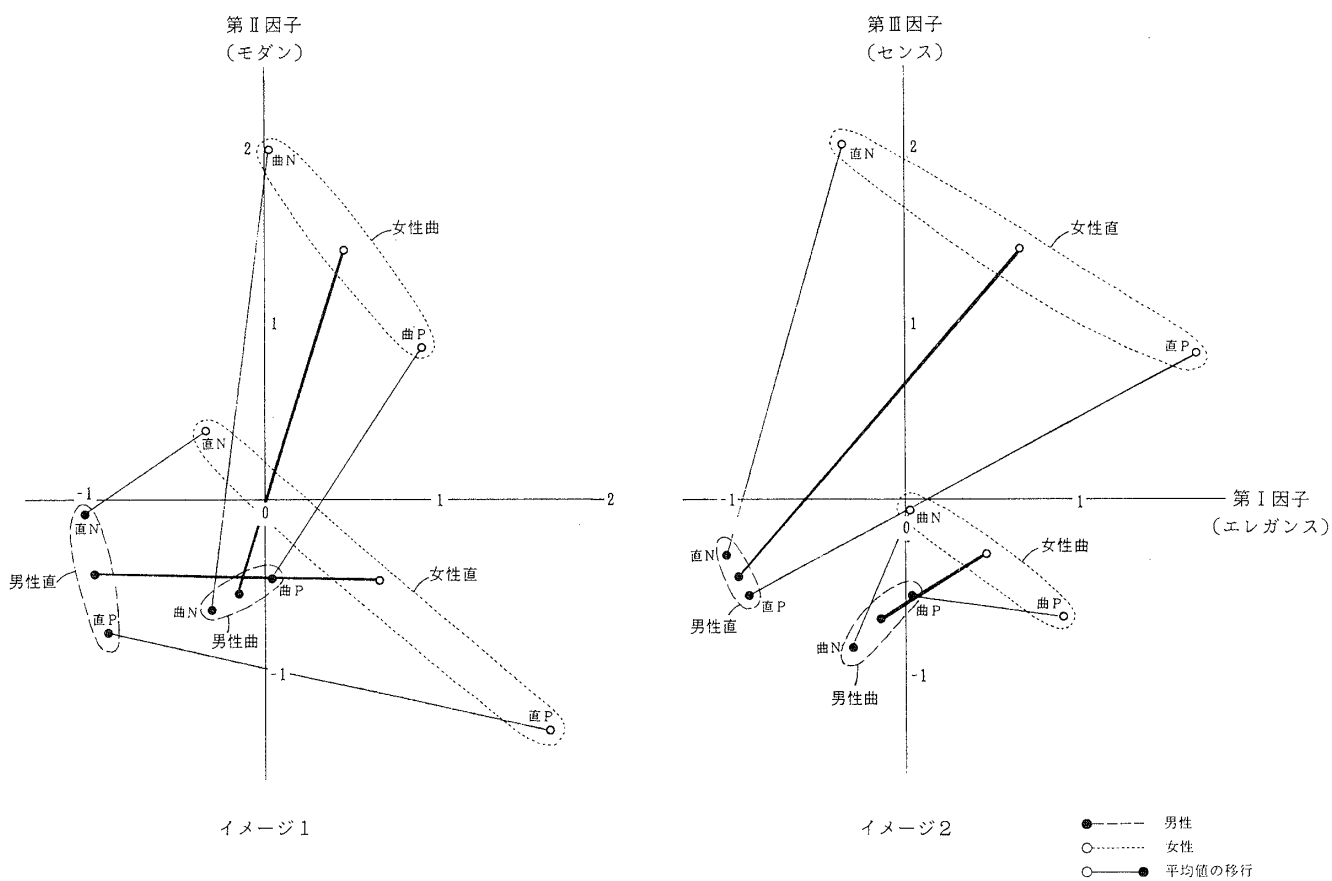


図 3 直線・曲線柄 (ポジ・ネガ別) とイメージ

雅)は第III因子に属し、独立していた。

第II因子に属し〈上品〉と関連の強かった〈近代的〉〈洗練された〉は女性では第I因子に属して〈きれい〉〈個性的〉と関連が深かった。なかでも女性において負荷の高かった〈個性的〉〈上品〉は男性においてはマイナスの負荷で、反対に男性において負荷の高かった〈快適〉は女性ではマイナスの負荷であった。

女性の第II因子に属していた〈快適〉〈親しみやすい〉〈好き〉が男性では第III因子に属していた。

さらに、表2より抽出した3因子を直交させた空間が男女高感性群における8図柄のイメージの空間である(図1)。男女高感性群とイメージの関連をみるため、各図柄(ポジ・ネガ別)の因子得点およびその平均値を求め、これをイメージ空間上に布置したのが図2, 3である。

図2のイメージ1によれば、男女とも花柄をエレガント、水玉柄をエレガントでないと評価していた。縞柄に対して女性はモダンではないが、エレガントだと評価し、男性はモダンでもエレガントでもないと評価していた。

格子柄に対して女性はエレガントだと評価し、男性はエレガントでもモダンでもないと評価していた。

水玉柄に対して女性はエレガントでないがモダンであると評価し、男性はエレガントでもモダンでもないと評価していた。

花柄に対して女性はエレガントでしかもモダンと評価し、男性はエレガントだがモダンでないと評価していた。その評価は男女間ポジ・ネガで逆であった。

また、女性は男性に比してポジ・ネガ間の評価の差が大きく、4図柄ともエレガントで、モダンであると評価していた。女性は男性に比して4図柄ともポジをエレガントで、ネガをモダンであると評価していた。

イメージ2によればセンス軸において女性は縞・格子柄が上位、水玉・花柄を下位に評価していた。水玉・花柄(曲線柄)のポジ・ネガに対する評価が男女間で逆であった。女性は男性に比して4図柄ともエレガントでセンスがあると評価していた。

また、4図柄ともポジ・ネガ間の評価の差は女性のほうが大であった。

つぎに、図3のイメージ1によれば男性の曲線柄をのぞき、男女ともネガに対してポジをモダンではないが、エレガントだと評価していた。

女性は男性に比して直線・曲線柄ともエレガントでモダンであると評価していた。女性は男性に比してポ

ジをエレガントで、ネガをモダンであると評価していた。また、イメージ2によれば、男性の曲線柄をのぞき、男女ともネガよりポジをエレガントだがセンスがないと評価していた。

女性は男性に比して直線・曲線柄ともエレガントでセンスがあると評価していた。また、ポジをエレガントでややセンスがあり、ネガをセンスがありややエレガントであると評価していた。

女性は男性に比して直線・曲線柄ともポジ・ネガ間の評価の差が大きく、さらに直線・曲線柄間に対する評価の差も大であった。つまり、図柄に対する好みは女性には非常にはっきりしていると推察された。

3.3. 数量化分析

男女高感性群の数量化分析結果¹⁰⁾¹¹⁾により、〈優雅〉〈近代的〉〈上品〉〈個性的〉〈好き〉の項目において男女間に差がみられた。男性における〈個性的〉はポジ・ネガ(色)の影響が強く、他の4項目は直線・曲線柄(形)の影響が強く、女性とは逆の結果であった。

また、因子別にみれば男女とも第I因子については直線・曲線柄が、第III因子についてはポジ・ネガが強く関与していた。第II因子については男女が逆の結果で、男性は直線・曲線柄が女性にポジ・ネガの影響が強かった。つまり、男性は形で、女性は色で評価する傾向が強いと推察された。

3.4. 分散分析

男女高感性群の分散分析結果¹⁰⁾¹¹⁾により、男性において〈個性的〉〈快適〉〈親しみやすい〉を除く項目は直線・曲線柄の影響が強く、女性は大半の項目でポジ・ネガの影響が強かった。すなわち、男性は形で女性は色で評価する傾向が認められた。

4. 要約

被服は直感や感情に訴えて美的感情を誘起するものであり、色、図柄などが互いに共存して感情効果に影響を与えていると考えられる。既報¹⁰⁾¹¹⁾において、女性高感性群、男性高感性群それぞれの特徴的結果を得た。今回は男女高感性群による図柄に対する感情評価の相違点はどのような点であるかを究明したいと考え比較・検討したところ次のような結果を得た。

- 1) 明らかに因子構造に違いがみられた。
- 2) 女性は男性より花柄・水玉柄(曲線柄)をモダン、縞・格子柄(直線柄)をセンスがあると評

価していた。

- 3) 水玉柄・花柄のポジ・ネガに対する評価が逆で女性にはネガを男性はポジをセンスがあると評価していた。
- 4) 女性には男性より4図柄ともエレガントでモダンでセンスがあると評価していた。
- 5) 女性には男性より直線・曲線柄間、ポジ・ネガ間の評価の差が大であった。
- 6) 女性には色で、男性には形で評価する傾向が強かった。

おわりに、本研究にさいし、統計処理に関して終始で協力いただきました宮本雅子および北村敦子姉に深く感謝いたします。

文献

- 1) 堀 真：高感度人間，モチベーションリサーチ研究会定例研究会報告書（1979）
- 2) 加藤雪枝，梶山藤子：被服における縞柄の配色効果，織消誌25（1984）38
- 3) 吉岡 徹：被服における図柄イメージ，家政誌36（1985）793
- 4) 小菅啓子，小林茂雄：ストライプ柄のイメージに関する基礎的考察，織消誌31（1990）42
- 5) 吉岡 徹：縞柄の2色配色におけるイメージ計量，織消誌31（1990）250
- 6) 宇野多美子：水玉模様の感情効果について，梅花短大紀要27（1978）51
- 7) 壁谷久代，加藤雪枝，梶山藤子：被服における色彩と図形の知覚に関する研究，織消誌21（1980）35
- 8) 飯塚弘子：柄の効果に関する一考察，文化女子大紀要13（1982）187
- 9) 小菅啓子，小林茂雄：水玉柄のイメージに関する基礎的考察，織消誌31（1990）35
- 10) 鈴木伸子，中谷眞三代：高感度人間の図柄に対する感情評価，日本色彩学会誌17（1993）119
- 11) 中谷眞三代，鈴木伸子：感性型人間の図柄に対する感情評価，日本色彩学会誌（1997）34
- 12) 西平重喜：統計調査法，培風館（1982）183～189
- 13) 水野哲夫：統計の基礎と実際，光生館（1986）220～221
- 14) 千々岩英彰：色型人間の研究，福村出版（1988）151～235

（受付日：1997年4月9日）

著者紹介



なかに まさよ
中谷眞三代

昭和35年奈良女子大学被服学科卒業

昭和57年滋賀県立短期大学講師を経て，現在滋賀県立大学人間文化学部助教授

消費生活論，服飾デザイン，人間文化論等を担当

日本消費者教育学会，日本家政学会，日本衣服学会，日本繊維製品消費科学会に所属



すずきのぶこ
鈴木伸子

昭和41年奈良女子大学被服学科卒業

現在滋賀県立大学人間文化学部助教授

色彩学，色彩学演習等を担当

日本色彩学会，色彩教育研究会，日本家政学会，日本服飾学会，日本衣服学会に所属